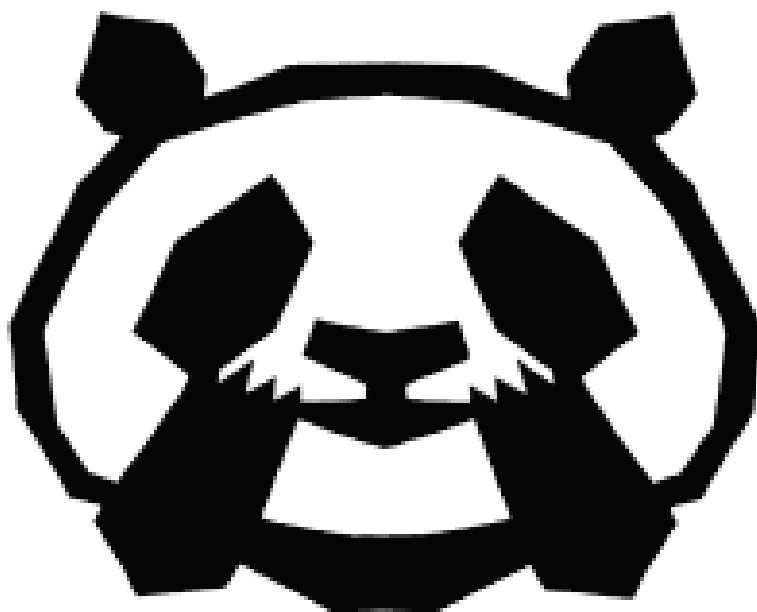


IV部



調査プログラムを終えて

- ・ 個人レポート
- ・ 他己紹介
- ・ 写真

現状維持では生き残れない先進国家

経済学部 4年 Charin Polpanumas

日本は現在十分豊かな国である。全国加重平均額の最低賃金は、一時間あたり2個以上のビッグマックを購入することができる金額になっている。運がよほど悪くなければ、最悪の場合フリーターをやっても不自由なく、食糧、住処、衣類、医薬など基本的ニーズを満たすことができる。それも世界水準で見ると、極めて安価な代償で手に入れることができる。他の先進国家並の生活水準を保ちながら、社会保障や租税に支払う国民負担率はスウェーデンやフランスの約6割しかないことになっている。すなわち、日本国民は今までずっと30%オフのバーゲン・セールスを享受してきたといえよう。しかし、それに国の経済成長と膨大な財政支出が裏付けている。経済成長が伸び悩み人口の歪みの生み出した財政問題が深刻化している今、その「心地いい夢」から目覚める時が来たのかもしれない。

日本の大学生は中国の学生から活気溢れる印象を受けた人が多いと聞いたが、実際はそうであろうか。私から見ると、その活気あふれる印象が誰かもの大学生が持つべき本来の姿だとしか考えられない。一般論を展開するつもりはないが、いわゆるゆとり教育のせい、大学で出会ってきたほとんどの学生は決まったレールに何回も走り回る山手線の緑色電車にみえる。そこそこ入試を頑張っている程度名の知れた大学に入り、そこそこ部活か何かをやりながら4年間を過ごした後に、ちゃんとした会社に入り、終身雇用制度を最後まで頼り切るような、夢も希望もない生活を繰り返すだけで、新幹線みたいに終点となる目的を持たず、只々走り回るだけの人生だと感じてしまう。それも彼ら自身にすべての原因があるわけではなからう。約1割の大企業が約9割の製造付加価値額を占めるような大企業が経済を支配している現状、大企業の正社員枠を、すなわち安定性を求めることはある意味でリスクの少ない合理的な選択と言わざるを得ない。更に、それさえできれば基本的ニーズどころか、時々ボーナスで家族旅行もでき、退職後年金ももらえるという「ハッピーエンディング」が必ず約束される、ある時代までは。

日本経済をみると、戦後時代みたいに成長を活発させるような原動力があるように見えず、しかもより良い生活水準を追求するという目的もそもそも必要ない。むしろ、現状維持に徹すべきだというのも合理的に聞こえる。確かに、少子高齢化がもたらす貯蓄率の低下や財政支出の拡大などによる財政問題は急遽解決すべき課題に違いない。しかしながら、日本がそのような問題を解決している最中、中国のような新興国は技術進歩を重ね、国際競争力を高めようとしている。まさに、高度経済成長の日本がモットーとして称える文字通りの「追いつき追い越せ」である。いつの日か日本は最先端の技術を誇る国でなくなるかもしれない。このまま、日本企業がいつまでも「日本人向け」の財やサービスを提供し、世界に目を向けず残り少ない国内需要を争い続けられれば、日本が世界経済から疎外される可能性も十分ある。

ガラパゴスになりたくなければ、今一度世界に飛びたつ必要があるに違いない。

研修に参加して

商学部 4 年 飯山 聖基

報告書冒頭の自己紹介でも簡単に触れたことだが、私が今回このプログラムに参加を決意した理由は、国際社会における中国のプレゼンスが急激な高まりを見せる中、自分が生きていく世界は今後どのように変化していくのだろうか？ということへの示唆を得たかったからである。冷戦時代の言葉を借りれば、これまで世界をリードしてきたアメリカや日本といった西側諸国に対し、中国という東側の国が経済力の面で世界第 2 位まで上りつめてきた。多くの国々が中国に注目する中で、これまでになかった新しい価値観が主流になってくるのではないだろうか？

新しい世界についてのインフルエンサーたる中国の社会や文化、雰囲気を感じたかったし、内部で動くアクターのリアルな声に触れて、実際に起こっていることを自分の目で見たかったのである。

日本人としての私の考え方が中国滞在で多く裏切られ、辟易しながらもこれまで安住していた考えを変えていく決心をするというのが、何となく私がこの研修で期待していたことであった。しかし、「残念ながら」その期待は裏切られ、それとは全く異なる新しい認識が私の中で生まれた。日本で中国経済について研究し、中国で実際に多くの方と触れ合う機会を持ち、私が認識したことは、心理的距離の近い国としての中国の存在であった。多くの機関訪問の中で語られる言葉には「なるほど、確かにその通りだ」と納得を示し、現地で活動する日本人の姿からは苦難というより日々の充実を伺えた。もちろん生活様式や文化などには大きな違いがあるのは事実である。

具体的には、中国の国策を司る財政省や人民銀行の方のお話を聞いてのこと。高齢化やインフレーションなど中国が直面している問題の認識とその対策、これからの中期的 Vision のあり方。それらには、異論よりも確かに・なるほどという感情が先行した。当たり前と言えば当たり前のことだが、懸念される格差や環境問題にも危機感を抱き対策を講じている（訪問前は、社会問題に見向きもせず経済成長第一に掲げる中国の姿を勝手にイメージしていた）。

復旦大学生と日中経済についてディスカッションを行う場においてのこと。日本の高度経済成長の経験を基に中国経済の課題と展望について意見を交わしながら、互いの主張やその背景を汲み取り、過去の失敗から学んでいこうとする有意義な時間を互いに創り出すことが出来た。

中国を生産拠点・市場とし活動している日系企業を訪問してのこと。政府の規制、労働者の要望、消費者の選好に苦戦しているとのことだったが、それらの問題は経済学で説明のつくものがほとんどであったように思う（例えば、『労働供給』と『労働需要 = 賃金』の関係）。また、中国人と働き、中国人に対してビジネスを展開することに充実感を抱く姿は、国民性を超える共通項を伺わせた。

もちろん限られた機関に対する、1~2 時間という短時間の訪問の中で、浅学非才の私が受けた印象であることには留意してのことだが、日中間の自分なりの差異を感じて得た認識を最後にまとめようと思う。

「日本人は、外国を知らないし、自国を知らない。」

GDP 上位国がその成長率を逡増減させる中、著しく高い成長率を持つ国が台頭している。グローバル化の進展は、国家間の壁を取り除いていく一方で、対峙する機会が多くなった国同士の違いを浮き彫りにさせる。新しい状況下で、新しい関係が構築される昨今の国際関係の中、果たして個人としての日本人の意識はどれほど変化に対応できているのだろうか？

今回の研修で、私は見事に中国に対する意識を裏切られた。相容れない相手国ではなく、日本との同調性のある隣国であるという認識を得た。日本にいながらではなく、実際に海外に出る経験を積んでこそ分かることがあると思う。それは、外国についての考えが深まることは元より、日本という国を相対化して考える経験である。

日本は相手国に対する先入観を払拭していかなければならないし、語学力やコミュニケーション力、勤勉さの不足など、グローバル社会で活動するには脆弱すぎる日本人の素地について知らなければならぬと思う。それが出来なければ、今後世界に遅れをとる要因となり得るだろう。私自身、それを強く自覚してこれから歩んで行きたい。

中国を通じて日本を考える

商学部 4 年 内野 琢郎

優秀な中国の人材

この中国の短期調査を通して、中国には非常に多くの優秀な人材がいることに脅威を感じました。例えば、私達が訪れた復旦大学の学生、彼らの中に誰ひとりとして、英語を流暢に話せない生徒はいませんでした。彼らの話を聞くと、小学生の頃から朝の八時から夜の十時まで勉強をしていたらしく、また、大学に入ってから日本の大学のようにほとんど遊ぶ時間がなく、一日のほとんどを勉強に費やすとのことでした。

二つ目の例として、最終日前々日に訪れた中国財政部の若い職員の方々の優秀さに驚かされました。中国に行く前は失礼ながら中国の政府機関に対して強引で、野蛮なイメージがあったのですが、財政部の若い職員の方々のお話を聞き、彼らが教育からインフラまで中国のマクロ経済に関して非常に幅広い知識を持っていて、予算の決定においても各方面の状況を十分に把握し、慎重に予算を割り当てている事が分かりました。正直、事前に予想していたイメージとは180度違った印象を受けました。

このような体験を通して、私は中国では優秀な人材が育ってきていることを感じました。そして、彼らの共通点として、優秀な人材と呼べる人のほとんどが英語を話せる事に気が付きました。中国政府はGDPの4%を近い将来、教育費として投資する方針を示しており、少子高齢化が予想されるものの中国の人材の質に関する見通しは明るい印象です。一方、日本では、最高学府と呼ばれている大学郡の学生でさえも、大半の学生が英語を話すことができない状況です。日本も中国の人材に負けないためには、大幅なカリキュラムなどの変更、拡充など、これからのグローバル市場に見合った教育、人材育成の工夫が必要であると感じました。

中国の富裕層の増加

今回の短期調査を通して、中国では富裕層が増えてきている事に気が付きました。上海のレストランでも、フォードやBMW、ベンツの車が河川沿いにズラート並んでいたことや、上海の河川には絢爛な観覧船が幾隻も浮かんでいたこと、大型モールの中にはグッチやシャネル、ルイヴィトンなどの有名ブランド店が幾店も入っていた体験から中国の富裕層の増加と勢いを感じました。この体験を通して、中国は「工場」としてではなく、「市場」として成熟してきているということをひしひしと肌で感じる事ができました。

中国人と日本人

中国人と日本人の性格、気性の違いをこの旅行を通して感じました。具体的には、中国人の方からは合理的、個人主義、押しが強い、画一的であるという印象を受けました。そう感じた理由は、北京の公

園の池などで人目をはばからず遊泳している人がいたこと、売り子の人に拒否した商品をいつの間にも買い物かごに入れられていたこと、中国人男性の髪型のほとんどが角刈りだったこと、中国の方の色々な面を見ることができたからです。

一方で、中国から相対的に見た日本人のパーソナリティは、落ち着いている、謙虚、協調的、卑屈、こだわりが強いという印象が思いつきます。こう感じたのは、日本でよく見られる、場の空気を読むことや、道を空けるときにお礼を言うこと、それぞれの人がオシャレをしたり、着飾ったりという慣習が中国では見られなかったからです。

そして、この日本人の性格が日本企業の強みに繋がっていると今回の調査を通して感じました。

日本人の性格の日本企業への影響

私は中国と日本のパーソナリティの違いを通じて、日本人（日本市場）の性格、特に、相手を思う謙虚さとこだわりのある性格は日本製造業の製品品質や機能に大きく貢献していると感じました。

実際、私達が訪れた松下電源会社に関しても、製品品質にこだわりを持っており、担当者の方は「低品質の製品は非常に危険であり、お客様に危険を及ぼす可能性を考えると、たとえ中国市場で安かろう、悪かろうがはやっていても、製品の品質は落とせない」とおっしゃっていました。

相手を気遣う心とこだわりによってもたらされる高い機能、製品品質は、その製品のファンを作る。そして、そのファン達は、製品の価格が高くてその商品を買ってくれるため、結果として、日本企業は価格競争に巻き込まれずに高い付加価値を付けたまま製品を売ることができる。また、そのようなファンが増えることでブランド価値が創出されて、その製品の顧客的な価値も高まって行き、結果、付加価値の低い商品が横溢している市場でも、高付加価値の商品の販売を維持できる。富裕層が増え、成熟しつつある中国市場では、このような形で生き残って行く日本企業が少なくないと思います。

しかし、機能を重視しすぎるあまり（品質にも言えますが）、もはや中国人が求めるスペックを大幅に超えた商品を作りだし、製品の機能を価値づくりにつなげられない企業が後を絶たないのが現状でもあります。液晶テレビに関して言えば、中国人は一定以上の画質、品質でコンテンツ見られれば良いのだから、たとえ、日本企業が画素数の多さや解像度が高いと中国の消費者に訴えかけても、彼らの心には響きません。この事実から伺えるのは、これからは、ただ製品の機能、品質にこだわるだけでは高い付加価値の創出、高い利益を得ることはできないということです。これからの日本企業は、wii や iphone のように顧客のライフスタイルに合った商品や、顧客の潜在ニーズを掘り起こすような新しい価値を提案できる商品を作っていくことが求められるのかもしれない。私は、豊富な高技術の蓄積がある日本ならば、そのような商品を作ることができるはずだと考えています。

中国短期調査を企画してくださった毎日エデュケーション様と如水会の支援者の方々には大変お世話になりました。この場を持って感謝申し上げます。

中国短期海外調査を振り返って

社会学部 4年 津覇ゆうい

私が中国海外調査に参加した理由は2つあります。一つは、ちょうどこのプログラムの参加者を募集していた時期、私は就職活動のまただ中でした。リーマンショック後の不景気、それに続く東日本大震災。「就職大氷河期」とか「大学卒業者の就職率6割」といった見出しがメディアにあふれ、周りの大人たちから気の毒がられながらスーツで都心に通う日々でした。そんななかで、高度経済成長期の、数日の就職活動で内定を複数もらい、接待を受けるというような華やかな就職活動の話聞くことが多く、心底うらやましく感じました。経験したことのないバブルの時代をみてやりたい、中国に行けば当時の日本を垣間みられるのではないか。これが一つ目の理由でした。二つ目の理由は、国際協力の仕事を志望していた私にとって人民銀行、IMF、JICA など国づくりに深く関わる機関を訪問するのは魅力的な機会でした。これらの理由から、この調査は将来の自分が働く上で大きなものを与えてくれるはずだと期待を膨らませて中国へ向かいました。

○ 渋滞、ビル、スモッグ

実際に行ってみてその規模に圧倒されたもの、それが渋滞、ビル群、そしてスモッグです。片側6車線の道路にひしめく車。これでもバックナンバーによって走る曜日を割り当てられたり、車の販売を抽選にするなどの規制を行っていると聞いて、さっそくその市場の大きさを見せつけられました。

立ち並ぶビル群もまた中国の成長の勢いを感じさせました。森ビルが運営する492mのビルが現在上海で最高ですが、その隣には数年後に完成する上海最高になる予定のビルが建設中でした。夜の上海ではビル群が資金力を持って余していると言わんばかりにきらびやかな装飾を競い合っていました。

その夜景を、濃霧のようなスモッグが覆い、せつかくの高層ビルのてっぺんはかすんでいます。スモッグが、都会から発せられる光を反射し、夜とは思えないほどの明るさでした。北京も上海も、渋滞、ビル、スモッグは常に私たちを囲んでおり、いまでは中国と聞けばこの情景がまっさきに思い浮かびます。

○ 政府機関、国際機関、企業を訪問して

今回の調査ではさまざまな政府機関、国際機関、企業、そしてOBの方々に訪問させていただきました。すべての訪問が興味深く、特徴的で好奇心がかき立てられるものでした。一つ一つの訪問については書ききれないのですが、一言で感想をいうと、自分が勉強して考えなくてはいけないことがありすぎるというのを実感しました。立場は違っても、皆様がこの国のパワーに支えられたり、一方で戦ったりしながら、自国や世界や自社の成長の可能性を信じて国を創っていくとする姿勢はかっこよく、あこがれを抱きました。そして将来このような立場の方々と一緒に仕事をするチャンスがあるかもしれないと考えると心が引き締まると同時に、自分の勉強不足や英語力の差を直に目の当たりにして、これからの勉強に身が引き締まる思いがしました。

中国研修個人レポート

○ たくさんの人々との出会い

訪問先の方々、市場で会話した中国の方、先生、そしてプログラムのメンバーなど、このプログラムを通して出会った方々からは、人生の先輩として、外国の方として、友達として、本当に多くの刺激を受けました。感謝しています。

特に、プログラムのメンバーはずっと一緒に出発前から議論の準備をしたり、中国でも行動をともにしていくなかで、自由に議論したり疑問をぶつけたりしました。密度の濃い時間を過ごしお互いの価値観や興味を共有し、思いがけない考え方に触れることができました。このプログラムを学生生活のなかで大きな意義を持つものにしてくれた仲間たちに感謝しています。

今回、学んだこと、印象に残った言葉、疑問を抱えてもう一度自分がこれからどのように世界と向き合っ生きていくかを考えていきたいと思います。

中国で考えたこと・感じたこと

社会学部 3年 兼国彩香

この海外調査を通して様々なことを感じ、考えた。実際に体験することで、本やインターネットで得るだけの情報では味わえない感情が生まれると思った。

○ 興奮

中国には私の想像を超えるものがたくさんあった。

きれい！空が明るい！中国到着日の夜、上海の夜景に歓声が上がります。私が想像していた上海は中国の横浜だった。実際の上海は、想像以上にこれでもかとばかりに光り輝いていた。スモッグが光に照らされて空が明るく見える。光を放つ高層建築に囲まれて、私はこれから世界一になろうとする国にいることを実感した。

上海一高い展望台を持つビル。地上101階、492メートル。どこまでも広がる都市と建造中の建物。発展していこうとする貪欲さとエネルギーを俯瞰したような気持ちになった。

万里の長城は想像をはるかに超えた、どこまでも続く急な階段だった。周囲はごつごつした山で他に建造物はない。なぜこんなところにこんなものを、と思った。その建築にかけられたエネルギーの大きさは今の中国にも受け継がれているような気がした。

目がかゆい、のどが痛い。北京に着いてすぐだった。初めは霧が出ているのかと思った。そのくらい周囲が白くかすんで見えるのだ。北京滞在二日目の夜に雨が降り、次の日の朝、空は澄んでいるし目ものども異常なし。スモッグだったのか…。大気汚染の度合いもまた、私の想像を超えていた。

○ 発見

国や世界や企業を動かしているのは「人」だということ。私にとっては発見だった。今回中国でいろんな方と実際にお会いして話を聞くことができ初めて、こういった組織を動かしているのには目に見えない何かがあるのではないかと知った。逆に言えば自分が、人ではなく何か組織を動かしているのだと思っていたことも分かった。

例えば人民銀行や財政部の方から直接中国の経済や政策に関わる話を聞くことができ、私たちが普段ニュースや新聞で見ると決定的な事項はどこか別の世界で起きていることではないのだと実感した。

今回お会いさせていただいた人たちは自分のことだけでなく、自分の国のことだけでなく、世界を見て、これから国が、企業がどうしていくべきなのかを決めていた。そこで働く人たちは生き生きといて視野が広くて、かつよかった。そこには今まで見たことのない世界があった。私もこの世界を動かす人たちの一員になれば、と大きな夢ができた。

○ 衝撃

中国では格差が問題になっている、と知識としては知っていた。しかし実際に目の当たりにしたときは、知っていたとはとても言えないと思った。衝撃的だった。

北京の繁華街の隅に、世界遺産の観光地である故宮の出口に、物乞いの人々がいた。通りの片側にずらりと並んでいた。皆、腕や足などがなく、その負傷した部分が見えるように上半身が裸だったり、ズボンの裾をまくりあげたりしていた。観光地を見てきた後だったこともあり、後ろめたさと、ここでやらなくてもいいのではないかと憤る気持ちと、そんな風を感じてしまう自分に対する嫌悪という様々な気持ちが入り混じった。今回調査で訪れる先はピカピカの高層建物が立ち並ぶ場所だった。そういう場所で会う人々との対照性がさらに私の衝撃を大きくしたのだと思う。

カンボジアに行ったときにも似たような光景を見たという津覇さんの話と、帰国後に中国で見たこの話をしたときの両親の反応によってさらに自分の無知を知る。カンボジアでは子供を連れ去り、眼をつぶしたり手足を切り落としたりして物乞いをさせその利益を得る組織があるという。そのような子どもたちが一番お金を恵んでもらえる物乞いだからだ。また、帰国して中国で見た光景のことを両親に話したら、戦後の日本にもそういう人はいたよ、と言われた。そうしなければ食べていくことができなかつたのだらうね、と。

「中国は発展途上国ですよ」と言っていた復旦大学の学生のことを思い出す。GDPが世界2位の経済規模を持つようになった中国が発展途上国なのかと感じる人もいると思うし、私も実際に見なければそう感じるだろう。しかし、たった1週間だが実際に中国に滞在してみて、本当に豊かな国とは何だろうかと思った。経済的に豊かであること、格差がないこと、最低限の生活を保障してくれるセーフティネットがあること…。豊かさを表す指標は様々だが、実際に見てみなければわからないと痛感した。

たくさんの方々の方で中国短期海外調査に行くことができ、貴重な経験をさせていただきました。また、中国短期海外調査のゼミのメンバーはみんなそれぞれの目標に向かって努力をされていて、刺激を受けました。この調査を通して出会うことができ良かったです。ありがとうございました。

中国人の視点から見た中国

経済学部 3年 朱 青(シュ セイ)

最初に言いたいことは、このプログラムに通じて、知識も友情も成長も獲得して、本当に良かった。

中国出身の私には、中国の事前イメージは同行の方々たちと違い、しいて言えば、中国の一級都市—上海、北京等と私の故郷の瀋陽という二級都市との違いを自分自身で感じ、見定めたいという思いで、このプログラムに参加した。また、となりの日本人はどうやって中国という歴史から結ばれる国を思うかも興味があり、主観的と客観的の意見を両方得られると期待していた。

具体的に予定日程表をみると、実に楽しめるスケジュールだと思った。北京でも上海でも市内見学と企業訪問を両立できるとは、とても充実で勉強になる一週間だと思った。その中には特に北京での人民銀行と財政部の訪問ができるということは、想像もできなかった。人民銀行と財政部みたいな政府重要機関は普段学生の訪問を受付もしないはずなのに、その短期調査を機に、向こうの話を聞けることは私にとってこのプログラムの一番の魅力だと思った。なぜかという、家族みんなは銀行員の影響で私も就職先が銀行希望だった。人民銀行の訪問を通じて、採用条件と求める人材像等を聞けたりだった。

実際に行ってみて後、内容はともかく、まず向こうの流暢な英語と臨機応変の質疑応答に感心した。質問するたびに、たとえ私たちはまだ何も知らない学生であっても、まじめにメモを取ってから考えてそれで分りやすい英語で返答することこそ、これは中国人民銀行の水準だと思った。日本人の方にはあまり詳しくないけれど、中国のオフィシャル機関は普段普通市民を相手にしない、なかなか直接の交流ができない状況だ。にしても、今回の訪問で丁寧にいろいろ教えてくれて、本当にありがたいと思った。

しかし、中国人民銀行の採用条件を実際に聞いてみて後、やはり中国の学歴格差が深刻だと思った。中国人民銀行の採用条件は博士学位取得者かつ国家公務員合格者かつ中国人民銀行の独自試験合格者である。ただ中国の国家公務員の競争倍率でもきわめて高く、何万人から一人を選ぶと言ってもすぎない。こんな厳しい受験戦争で生き残れても、各試験だけでふさわしい人材を判断することは本当に妥当でしょうかと思った。

以上のように、中国のオフィシャル的発言を聞くチャンスがあるだけではなく、中国の有名大学—復旦大学の大学生たちとの交流もあった。復旦大学経済学院の孫教授は引率教員劉先生の大学院の先輩という関係のおかげで、私たちは今回復旦大学と交流ができた。事前に復旦大学は中国の TOP10 の有名大学で、進学倍率はかなり高いものしか知らなかった。個人的にガリ勉のイメージを想像したけれど、実際に 3 時間のディスカッションに通じて、この事前イメージをひっくり返した。向こうは院生でかなり知識レベルが高く、どなたも英語がペラペラだった。私たちのグループは経済成長をトピックとして発表してから、向こうのグループは迅速に各テーマについて自分の観点を述べた上、私たちと日中近年のホットな経済関連トピックについて熱弁した。今回のディスカッションに通じて、お互いの国にもう一步深く理解したのではないかと思った。将来の日中関係の発展は仲良くならなければならないといわれ続けても、私たち若い世代の努力が必要だと思う。

素晴らしい交流の後、日中両方の学生は一緒に食事をした。勉強以外の話も食卓で盛り上がり、英語でも喋りやすい雰囲気楽しかった。今でも日本に戻ってからメール連絡を保っている。こういう日中学生交流もこれから広がったら、両方の個人にとっても、国にとっても、重要かつ有意義な活動だと思う。

このプログラムで分かったことは、一つの国を理解するためには、自分で行って見て、肌で感じる事が一番大事とのことだと思った。実は、中国でインターネット言論制限があり、「Facebook」や「twitter」等の社交ウェブサイトが中国でブロックされ、アクセスできないようになっている。このため、中国で知られるニュースが制限されている。しかし、近年中国では新興的な社交ツール--ツイッターみたいな交流方式が人気になって、中国語では「ウェーボー」という。こちらは即時性があり、より言論自由で、著名タレントも有名社長もメディア業界者も一般市民も幅広く使われている。

近年中国はすさまじいスピードで経済成長は果たしているのは事実だが、一方その高い GDP 成長率に貢献しているのは過度な資源開発や、環境への配慮が欠けること等だ。「ウェーボー」で話題になっているのは、山西省の炭鉱の未成年労働者とその過酷な労働環境、都市管理者の横暴行為、各種な重大事故等だ。いずれも厳重な社会問題で、これらに通じて私が知る中国は：政府の高官たちが腐敗で貪欲、官僚たちが自分の権勢を借りて威張る、一般市民が弱い者をいじめ、強い者にペコペコする、仕事探しも、進学も、医者を見るも、全部人脈が金銭で働かなければならない。中国にいずれ帰るが、この歪んで病んでいる社会に少し絶望な気持ちを抱えている。

しかし、前述のように、自分自身で感じることはこれと少し違った。一週間という短期間の訪問であらゆる方面を見極めることができかねるけれど、少なくとも、政府側人間は無能、腐敗という点には新たな認識を持つことができた。今回の訪問先は有名日本企業、IMF、JICA、財務省、中国人民銀行など、どの機関の説明者も思考明瞭、英語堪能、礼儀完璧な方だった。私の目で見えたものは極一部分だけかもしれないけれど、インターネットで書かれたものもごく一部分だけのことだと分った。片面な情報で社会に絶望することではなく、自分自身を磨き、社会に自分にできるだけのことをして、悔いなしかつ有意義な人生を過ごしたいと決心できた。

短期間のプログラムけれど、今までの思考をきちんと考えなおすことができ、自分のやりたいことが分かるようになれるというきわめて有意義な過程だったと思う。これからも自分の歩みたい道を自分なりの考えを貫き前に歩みたいと思う。

劉先生も、ともに行ったメンバーたちも、ありがとうございました！

中国研修かきくけこ

法学部 3年 中尾 実貴

中国から帰国して早くも2ヶ月がたとうとしている。日々変化する中国は、あの一週間からまた随分変わっているのだろうと思う。

ここでは、研修旅行に参加して学び、感じた「かきくけこ」について述べたい。

【か 格差】

新聞やテレビのニュース、文献に触れ、知識としては知っていた中国において語られる「格差」、実際に目にしたときは言葉を失った。きらびやかに飾られた観光地やイベントの影では必ず、孤児や手足の無い物乞いが路上でパフォーマンスをし、貧しい生活を送っている。限りなく空に伸び行く高層ビルの足元で暮らす人々の生活様式、疲れた表情、土にまみれた洗濯物や埃をかぶった食品…今でも頭から離れない。

帰国直後は、貧しさを「見てしまった責任」を強く感じ、自分がこれから何をすべきか、どうすれば中国の格差が是正され、平等で正当な生活水準の確立に貢献できるのか…と、良くも悪くも視野が大きく外向きに広がっていたように思う。落ち着いた今、自国を省みる余裕ができた。日本は、他国との比較においては圧倒的な安心や安全を享受しているといえる。一方で、まだまだ見直されるべき国内格差はある。今回目にした現実には深く胸に刻まれ、自分ができる社会貢献とその影響範囲に対する目標や志が高くなった。しかし常に、自分の身近に目を配ることをも忘れず、できることから取り組んでいこうと思う。

【き 詭弁】

これは少し厳しいかもしれない。企業・機関訪問では、多くの事を学んだし、またぶしつけな質問にも丁寧に答えていただき、大変感謝している。しかし、とりわけ政府系の機関訪問や中国の方との会話では、時に矛盾のある論理展開があったようにも思う。相手側の強硬な姿勢、自信のある態度が裏づけになり、主張を押し切られることもあった。「私たちには関係ないから分からない」「それは他の管轄だからここでは話せない」と一蹴されることもしばしば。広大な土地を一党体制のもとに抱える国であれば、機関同士の連携は必須である。また、注目される先進国家として、発言の一つ一つが国際的に大きな影響力を持っていることに自覚を持つべきだ。その責任意識の欠落、機関の間での情報透明性が確保されていない事実などから、発展しつつも「未熟、成長の余地と責任が十分にある」中国の実体を垣間見た気がする。

【く 悔しさ】

前述の「詭弁」のごとく、ディスカッションや質疑応答の際に鋭く切り込みたいと感じる場面が多々あった。しかし、自分の勉強不足や自信の無さ、遠慮や躊躇から、なかなか核心をつくことができなかつた。帰国して改めて調べなおしたり、考えなおしたりする中で、各所で一步踏み込んだ議論に至れなかつたことが幾度も悔やまれた。もちろん、言いたいことや思ったことをずばずばと言っただけの良いわけではない。日本人が美徳と考える「遠慮」の精神については誇りにさえ思っている。しかし、何かを伝えなければならない時、その時々にはふさわしい態度をもって積極的に声を挙げる勇気を持ちたい。(それが結果的に有意義な交渉や議論に繋がるかもしれない…例えば、チャイナドレスを1/5にまけたように^^)

【け 結束、とその難しさ】

「中国は縮小した世界地図」とは、研修中に財政省の方にお聞きし、大変納得したフレーズである。目まぐるしく発展を続ける上海や北京を先進国とし、そのペースに立ち遅れる西部を途上国とするならば、中国は世界の縮図そのものだ。大きく異なるのは、その格差ある広大な土地を、一つの政府が（表面上は）統一的に支配している点である。地球規模に話を広げた時、世界を統一する政府は無いし、いくらグローバル化が叫ばれる時代であっても、これだけ広がった格差社会を一つに統一し全人類が結束するのは簡単ではない。一方で中国は、共産党の一党支配の下に「中華人民共和国」がまとまりある一国として存在し、その故に他国からは「格差是正」や「情報公開」、とりわけ「一国としての責任感」を問われている。中国も近年こうした声に応えているようだが、ここで語られる結束ははまだ制度や額面上のものにとどまると考える。中国に同情的になるならば、ここまで格差の広がった地域をまとめ、それぞれに異なる政策を適用するのが、世界を一つにまとめるのと同じくらい大変であることは想像に難くない。中国では日々政策が加速的に変更されつつあるという。どの企業・機関もその慌ただしさに困っていたが、それ以上に政府自身も、速いペースで変わり行く社会に追いつくよう政策を出すことに精一杯なのではないだろうか。

【こ 行動力】

中国人、そして中国に住む方を見ていて、何よりも強い行動力を感じた。如水会の食事会でお会いした OB の方々には、新興国家中国に出向されるまでの海外渡航への熱意、バイタリティを始め、実際に生活される中で体験する（超！）異文化に鍛えられた強靱な精神力、体力に裏打ちされたまさに不屈の行動力を見たように思う。現地の言葉を学び、自分の足で歩き、交渉し、何か問題があったときも躊躇せず解決にむけて奔走していた。一方中国人の方には、露天商から大企業・組織の幹部の方まで、元をたどればとりわけ「利益追求」に根ざした行動力が強いと感じさせられた。そこに社会の未成熟さを指摘するのは簡単だが、その意欲や積極性は評価に値する。問題に直面し日々右往左往し、国際社会でもはっきりと意思表示のできない日本の現状を鑑みたとき、対する我が国は今「成熟」と「老衰」の区別をつけなければならない。文字通りの解釈では「利益追求」はあまり良い意味を持たないが、そこに根ざした行動力には、今の日本に欠ける圧倒的なエネルギーを感じた。

中国を「未熟」「途上国」とするのは簡単だ。しかし、同時進行する否定できない発展をも見た今、貧富が混在する中国の現状を踏まえ国際社会が中国にどうアプローチすべきか、そして日本も一国としてどう対応していくべきかは、これからも尽きる事無く議論されるべき問題だと実感している。

学生である私が、今できることとして頭に浮かぶことは多くない。しかし、過渡期最中の中国を訪れ、想像の世界にすぎなかった中国の現実に触れたこの経験は、生涯忘れ得ないだろう。この先待ち受ける選択や困難の場面における糧にできればと思う。

大変有意義な一週間だった。劉先生をはじめ、サポートしていただいた全ての方、そして研修メンバーにも感謝の気持ちでいっぱい。本当にありがとうございました。

調査プログラムを終えて

社会学部 2年 豊田美生子

はじめに

約半年間この短期海外調査プログラム全体を通して、本当にたくさんのことを経験させていただきました。現地に調査に行き、中国という国の空気に触れたこと、また多くの現地機関の方に直接お話をうかがったことは、本や資料の紙上の知識では得ることのできない実感を伴って、深く私の印象に残っています。この調査プログラム全体を通して、特に印象に残っていることが2点あります。一点目は中国の女性について、二点目は日本に対する知識不足です。以下にそれぞれの詳細について、述べていきたいと思います。

<中国の女性について>

現地の機関を訪問させていただく中で、多くの中国人女性が日系企業や国際機関で活躍されていることに驚きました。日本でも女性の社会進出は徐々に進んでいますが、育児と仕事を両立することが難しく、出産を機会に退職される方が多いのが現状です。中国では一人っ子政策の影響もあり、女性に対しても親の期待が大きく、親が育児に協力するというのは当然のこととして考えられています。また何よりも能力のある女性を重要なポストにつき、当たり前なこととして活躍されていたのが、とても印象的でした。私は中国の戸籍問題や格差問題について学んでいたため、法制度や社会制度といった面では中国は日本に劣っていると、思い込んでいました。しかし現地で活躍し、輝いている女性たちに会い、女性の社会進出の面では日本よりも優れた環境があると強く感じました。日本でも男女平等がうたわれていますが、出産後の職場復帰が困難であったり、また正社員として働き続けていくことに対して周囲から理解を得られなかったりと、女性が働く上での障壁がたくさん存在しています。このような現状を知るうちに、私は社会に出て働くことに対してなんとなくネガティブな感情を抱くようになっていました。しかし現地で活躍されている中国人女性の方に、日本の女性もあきらめずに働き続けてほしいという励ましの言葉をいただき、周囲の環境がどうあれ、私は中国の女性たちのように働くということにポジティブでありたいと思うようになりました。特別なことではなく、当たり前なこととして女性が活躍している姿に触れることができたことは、私のキャリアにとって大変貴重な経験になったと思っています。

<日本に対する知識不足>

復旦大学での討論会で、学生から「失われた10年を過ごしてきて、どのように感じたか」という質問をされました。しかし私は、この質問にまともに回答することができませんでした。この質問を受ける前、彼らから将来銀行員などの収入もあり安定した職業に就きたいという話を聞いていました。そのため私は、彼らはお金があれば幸せにはなれないという考えを持っているので、このような質問をしたのではないかと考えました。なぜなら私は日本の経済成長が停滞しているからといって、失われた10年を生きてきて、特別不幸さや、不自由さを感じたことはなく、幸せに暮らしてきたからです。しかしこの問いを帰国してよく考えたときに、この質問に応えられなかった本当の理由は、私が日本の若い世代が抱える問題（若年層の雇用問題

など)に注意を払っていなかったからではないかと感じました。復旦大学の学生は、私たちが中国の社会問題に興味を持っているのと同じように、日本の社会問題に興味があったのではないかと感じたのです。実際ニュースなどで報道されている、日本の政治や社会問題などについて私はあいまいな知識しか持っておらず、だれかに説明することなどできませんでした。他国が抱える問題には自然と目が向くのに、自国の抱える問題には目をそむけていたという自分の姿勢に大変ショックを受けました。もっと日本のことを知らなければいけないと反省し、帰国後は日本が抱えている社会問題や国際問題について勉強しています。

おわりに

この調査プログラムは私にとって、新しい価値観に触れることができたと同時に、自分の勉強不足を痛感した旅でもありました。中国という今最も勢いのある国には、人種を問わず、新しい世界に飛び込むことをためらわず、努力を怠らない方たちが集まっているように感じました。そのような方たちとかがかわる中で、上記に述べたように、自分のこれまでの考えを改めさせられることが本当に多かったです。帰国後日本で何気なく日々を過ごしている中で、授業を受けているときや、ニュース番組をみているときなど、この調査で実感したことが日常生活に結びついているということを強く感じています。

また何より一緒に準備をし、同じ現場を体験したゼミ生の存在に刺激を受けました。事前準備のためのゼミを通して、社会学部で勉強しているだけでは得ることのできない経済の知識を学び、また調査中のゼミ仲間との議論では、自分がいかに勉強不足なのかを思い知らされました。私は中国のほんの一部しか体験していませんが、多くの方々のサポートのおかげで、中国という枠組みにとらわれない多様な知識を吸収することができたと思っています。この調査プログラムで得た経験と反省をもとに、今後はさらに勉学に励むと同時に、内にこもらず新しい世界にどんどん足を踏み出していこうと思います。

最後に、今回のこの調査プログラムに協力してくださったすべての方々、また現地調査の前にお話を聞かせてくださった三井住友銀行の大久保様、サポートしてくださったOBの内海様には、改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。そして何よりこの半年間、一緒にこのプログラムをつくりあげ、たくさんの刺激を与えてくれた劉先生、ゼミのみなさん、本当にありがとうございました。

受け入れる、そして受け入れられる

経済学部 2 年 平川星座

中国短期海外調査で学んだこと、感じたこと。その全てを言葉で表現するのは容易なことではありません。これから社会人となるに際し、一番忘れたくないことを、そのまま文章にしたいと思います。

『自分を大切にすると同時に、異なる考えを持った相手のことを、
本当の意味で受け入れることができたならば』

中国から帰国した私は、この言葉の尊さ、それゆえの難しさを噛み締めています。

8日間という、長い人生から言えば針の先のような時を迎えるにあたり、私は多くの人と出会うことができました。そして、中国という、違う土地で生まれ育った人々と、私達日本人が共生していくことの難しさを実感しました。

復旦大学の学生との討論会。教育班であった私は、現地の学生さん達とプレゼンを交えたディスカッションを行いました。当然のことながら、彼らは違う角度から教育を見ていました。そしてただ中国の町を歩いているだけでも、両国の常識の違いというものに何度も遭遇しました。もちろん、どちらが正しいとも、間違っているとも言えません。

これらのことはある程度想像していたことでした。十人いれば、十通りの頭、心、そして彼らを取り巻く環境があります。そのような立場の違いによって起こる行き違いやすれ違いが、メディアを通して日々私達の耳に入って来ます。

しかし私は、そのような問題を「ビジネス」という観点から真剣に考えたことはありませんでした。

この度、企業訪問というまたとない素敵な機会を頂きました。その中で一番印象に残ったこと、それは全ての日系企業に共通した課題でした。その課題とは、「中国の常識と自社が持つポリシーとのすり合わせ」でした。日本の企業は自国市場の場合と同様、自社の製品に対する誇りを抱え海外市場に進出していきます。もちろん、例え自国内であろうとも、自分達の思い通りにはできず、ニーズ、組織構造、マクロ経済状況、市場の成熟度、競合他社の存在などによって、ある程度妥協点を見出さなくてはなりません。しかし海外市場ともなると、話はさらに複雑になります。現地の政治事情、日本人の常識では図り難いニーズ、慣習価格、労働者の質…そしてとくに中国は国土が広く、日本のように一国を1つの市場として捉えられないといった問題が出て来ます。海外に進出したどの企業も、このような自国市場にはない難しさに、日々頭を抱えているようでした。ある社員の方からも「工場の設備は日本から持って来たものだとしても、材料、人材は現地から調達しなければならない。そこが難しい。」と伺いました。

そのような中、日系企業の方々から教訓とも言えるある言葉を頂きました。

『オンリーワンだけでは、仕事はやっていけない』 『郷に入れば郷に従え』

「確かに自分にはやりたいこともあるし、譲れないものもある。だけど、現地のルールや常識、そして人々を受け入れないと、やっていけない。」

そういった意味がこの言葉には込められているのだと思います。

確かにこの言葉通り、訪問先の日系企業は全力で郷に従おうとしていました。現地のニーズはもちろんのこと、労働者の受け入れ方法から、中国政府との関わり方で…。

私はこのようなお話を伺い、また実際に中国人の方々が見る日系企業で働く姿を目の当たりにし、「企業が海外へ進出するとはどういうことか」「外国人と共に働くとはどういうことか」、初めて真剣に考え始めました。

もちろん、これは企業に限る話ではありません。私の心を掴んで放さないこの教訓は、国という大きなスケールから、私達 1 人 1 人の人間にまで、多くのことを教えてくれています。

益々グローバル化が裾を広げる中、私達が外国の人々と関わる機会は明らかに増えています。バックグラウンドを異にした人と共に仕事をし、いい関係を築くためには、自分のポリシーと相手のそれを、上手くすり合わせなくてはなりません。自分の考えを大切にしながら、同時に全く違う考えを持った相手のことも尊重するのです。そうしなければ、国籍を異にする人と共に良い仕事をするなど、絶対に無理なのです。しかも、“母国”という共同体への愛をも越えなければなりません。

もちろんこのことは決して単純ではなく、立場の強い者が弱い者を押しつぶす現象が起こります。今日私達を取り巻く環境を見れば痛いほどよくわかります。

しかし、中国に行き初めてこのような葛藤を直に感じた私は、もっと真剣にこの問題と向き合っていきたい、いかなければならないと思いました。自分が自由に暮らしている影で、地球の裏側で、他の誰かが不自由しているのではないだろうか。もっとお互いにとって良い関係はないのだろうか。『自分を大切にすると同時に、異なる考えを持った相手のことを、本当の意味で受け入れることができたならば』。そう日々考えることこそ、グローバル社会で真に必要な姿勢と言えるのではないのでしょうか。

中国短期海外調査で感じた、言ってみれば当たり前で、それゆえに大切なこの思いを胸に、日々邁進してまいりたいと思います。

最後となってしまいましたが、このような素敵な機会を下さった全ての皆様に、

心より感謝の気持ちを述べたいと思います。本当にありがとうございました。

そしてゼミのメンバーへ、皆さんから大変たくさんの刺激をもらいました。

このメンバーと一緒に活動できたことを、本当に幸せに思います。

百聞不如一見

社会学部 2 年 油谷さやか

「百聞は一見に如かず」ということわざがあります。この言葉はもともと中国の古典からできた故事成語でした。漢の時代、皇帝が異民族である匈奴を征伐するにあたって將軍の趙充国にどうしたらいいか尋ねます。すると趙は「百聞は一見に如かず。現地を遠く離れては状況をつかめないで、実際に現地に赴いて方策をたてます。」と答え、その後見事匈奴を討伐しました。今回の現地調査の私の感想を一言で表すと、まさにこの「百聞は一見に如かず」という言葉に尽きます。

私にとって中国を訪れるのはこの調査が初めてでした。しかしメディアなどで日々報道される中国ですから、「よく分からない」と思ったことはありませんでした。勝手に分かった気になっていました。そんな私の調査前の中国観は、経済大国である一方で社会的問題を多く抱えた、非常に不安定な発展をしている国というものでした。経済発展の恩恵を受けた一部の層だけが豊かな生活を享受し、彼らは社会的弱者や中国社会が抱える問題点について目もくれておらず、その結果として格差や環境破壊に代表される問題が生じているのだと考えていました。しかし実際に中国を訪れてみると、彼らがいかに冷静に自分の国を分析しているのかわかりました。よくチャイナリスクなどと言われそれらは実際に事実ではあるのですが、彼らはそのような状況も真摯に受け止め解決策を打ち出していました。いままで不安定で危ない発展をしていると思っていた中国ですが、それがどれだけ物事の一面しか捉えていなかったかを痛感しました。だからといって 8 日間の中国滞在で中国が「よく分かった」のかと聞かれれば、答えはノーであり、むしろ訪問前より「よく分からない」状態になってしまったような気がします。ガイドさんのお話にあったように、中国を見るのは盲人が象に触るようなものなのです。ある人は耳を触って「平べったい」というし、ある人は鼻を触って「細長い」と言う、それほどまでに中国はいろいろな面を持っているのです。しかし実際に現地の空気に触れ、そこで活躍するいろいろな方々のお話を聞いたことで、より多くの「象の体」を直に触ることができたと思います。そして中国以上に自分の国である日本について、よく知る機会となりました。最初に訪れた上海では、長引く不況により閉塞感で満ちている日本とはまったく違うエネルギッシュな空気に触れ、如水会の方々はそれを「日本の高度経済成長を見ているようだ」と表現していました。さらに日系企業の方々は日本の高品質な製品にプライドを持って「そこだけは譲れない」とはっきりおっしゃっていたのが印象的でした。復旦大学の寮のエアコンはほぼ全てと言っていい程日本のメーカーのものでしたし、学生も日本経済や日本の発展に学ぶことは多いと口をそろえていました。失われた 20 年をそっくりそのまま生きてきた 20 歳の私にとって、それら全てが新鮮でした。自分の国に対して肯定的な気分を持たない空気の中で育ってきたのに、私が生まれる前には日本にもこんなにも発展著しく輝いていた時代があったこと、そしてこんなにも日本は誇れるものがあるのかということ、身をもって感じました。しかし私を含め、その日本の良さを日本人自身があまりにも知らなさすぎるのではないかと、思います。日本のことをもっと知りたい、日本の良さをもっと世界に知ってほしい、そう思うようになりました。

隣国として、まさか匈奴のように討伐する訳ではありませんが、相手のことをよく知ろうと思ったら趙充国のように実際に現地に赴くことは欠かせないと思いました。以前読んだ新聞に、日本に行ったことのない中国人のほとんどが日本を未だに軍国主義の国だと信じている一方、日本に行ったことのある中国人のほとんどは日本を平和主義の国だと信じている、という記事がありました。これはまさに百聞は一見に如かずのことわざが表すところでしょう。固定観念や他人によって造り上げられたイメージに惑わされずに、自分の目で見て肌で感じ自分の頭で考えることの大切さ、そして喜びを感じた調査でした。指導してくださった劉先生、熱心に解説や質問に答えてくださった訪問先の方々、たくさんの有意義なお話をしてくださった如水会の方々、優秀で刺激を与えてくれた復旦大学のみなさん、滞在を楽しくサポートしてくれたガイドさん、私たちの調査を支えてくださったすべての人、そして一緒に勉強してきたゼミのみなさん、本当にありがとうございました。

☺メンバー他己紹介☺



◎メンバー他己紹介◎ 自己紹介とのギャップたるや^o^

Charin Polpanumas BY: 油谷

頼もしいゼミ幹。タイ語はもちろん、英語も日本語も大阪弁もべらべら。経済学部4年生ということもあって、経済理論などを適宜解説してくださったのがすごく助かりました。復旦大学との討論会や各訪問先でも鋭い質問をぶつけていたし、バスの中では「日本は核武装するべきだ」という主張を爆弾のように放ち、みんなで議論したのが印象的でした。でもああいうバスの中での議論の時間も楽しかったな。こういうまじめな一面とは一転、遊ぶときはとにかく楽しむ！上海のクラブでは誰よりもはっちゃけてたし、北京の3人乗りの自転車も誰よりもうきうきしてた気が(笑)そんなチャリンさんがみんな大好きです。ゼミ幹お疲れさま！ありがとうございました！



飯山聖基 BY: チャリン

副ゼミ幹事として仕事もこなし、メンバーにも信頼されるお兄さん(お父さん?)的な存在である。メーリス作成・オンライン投票・ファイル共有・SNS作成など、ゼミの情報インフラがすべて彼の手によって創られたと言っても過言ではない。おまけにカメラのメンテもこなすたよれる男である。…とある事件で不良説もあつたが、来年から女性雑誌のモテる職業ランキングで、SEに次ぎ2位の高級官僚を勤める。これからモテ男の予感がする！?リベラル・アーツを磨くため、古典書籍のヨハン・ゲーテの『ファウスト』やJ.D.サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』を熟読しているそうである。同時に2ch住民で、国民的アイドルAKB48で話が盛り上がるという萌えギャップもある。



内野 琢郎 BY: 朱 青

内野さんは温厚な人！めっちゃやさしい人で、学年が一番上なのにいつも丁寧語を使ってる礼儀正しい人！ごめん！褒めすぎかな？…いやいや本当本当！眉をしかめる顔も見たことない笑顔満点な人！グループ内の役職はカメラマン。一眼レフを構えていつも皆のさりげない顔を取ってくれる。おかげ様で皆のおもしろい顔をたくさん見られて、ありがとう！

内野さんの意外な一面というと、なんとボクシングやってるらしいおお！試合も出てるらしいおお！いやいや想像できないな～写真ほしいよ！内野さん！



津覇ゆうい BY:兼国

同室で一週間お世話になりました。性格はスーパーさばさばで頼れるお姉さんです。こんなお姉さんがほしいな。エキゾチック美人です。如水会の方に外人さんだと思われていました。反抗期継続中でお風呂は必ずお父さんより先に入るとのこと。「お前の湯気！」さえも嫌なんだとか。お父さんが聞いたら泣いちゃいますね。ダンスが得意で今はサルサにはまっているそうです。もし旅行をプレゼントされるならどこがいいか？という質問に「コロンビア」と返されたのには予想外すぎて反応に困りました。コロンビアでサルサをやりたいそうです。将来は海外を飛び回るお仕事なので結婚相手は一緒についてきてくれる作家さんがよいとか。



兼国 彩香 BY:豊田

出身:福岡やけん 所属団体:(まさかの)テニサー
特徴:女子力高め、かわいい(※ただしお酒に関しては例外)、方向音痴

エピソード①北京の下町の散策を終え、さあ集合場所に向かおうという時…まったく真逆の方向に歩きだそうとする。「逆ですよ」と周りが教え、納得したかとおもいきや…「えーあっち側じゃなかったっけ？」という主張を繰り返す。周り愕然。恐るべき方向音痴ぶりでした。

エピソード②如水会上海支部の方々との食事会にて…参加者自己紹介の最中コソコソと声。横をみると、白酒(度数約50%)が注がれた杯を何度もOBと飲み交わしている姿が…かなりの飲みっぷりでした。さすがテニサー!



朱青 BY:平川

朱さんの第一印象は、かなりのデキ女。わからないことや、中国に関して丁寧に教えて下さるし、とにかく頼れるお姉ちゃん的な感じでした。しかし！私は中国での一週間、朱さんのもう一つの魅力にやられてしまったのでした！そう、朱さんって存在自体が超超超可愛いんです！あのハニカんだ笑顔、そして「〇〇ですので～」という口癖に萌えまくりました！しかもめちゃくちゃおちゃめ！あら、この写真の朱さん、1人ウルトラマンですね(笑)。さらに大好きな漫画のことになる、目の



輝きが3ランクぐらいグレードアップします！あつ、でももう一つ忘れてはならない意外な一面と言えば……上海のとあるパブリーな晩、「私、普段はいい子ですので～…」と言いながらお酒をすすっていた姿が忘れられません…(笑)。

中尾実貴 BY:津覇

うわさのファッションISTA、みきてい☆ センスの良さは服にとどまらない！国際機関や政府機関の方に鋭い質問を流暢な英語で投げかけ大活躍。あ〜グローバル人材ってこういう人をいうのね。チャイナドレスにかけた執念はすさまじく、行く先々で物色。中国のおばちゃんにふっかけられても少しもひるまず、ファッションISTA強気の値切り交渉。交渉成立に味をしめ、商店街のおばちゃん相手に次々と値切りをキめ、戦利品をゲットしていく。へええ、グローバル人材って大阪のおばちゃんと紙一重なのね。豊かなりアクション、演技をまぜながらのコミュニケーションでみんな元気をもらってました♪



豊田 美生子 BY:内野

「かわいい子見るのが好きなんですよね。」「萌えー」「図書館戦争最高ー！」「いや、恥ずかしいし、(彼氏と)人前で手を繋ぐとかないでしょー...」というような、こだわりと毒舌を持つ一方、「美人じゃないって言われた〜(悲しそうに)」「コンタクトが痛い...」「fjk す sdf ふあ fd ふああ sdf ふじこ(寝言で)」というようなかわいい一面も持つシヨコタン系女子の豊田さんです。彼女を見ていれば、ギャップ萌えという言葉の意味を噛みしめることになるでしょう。ちなみに、写真は中国の公園で鯉に餌をやっている時のものです。



平川星座 BY:中尾

一度聞いたら忘れられない、ロマンチックな名前を持つ私のルームメイト、星座ちゃん。2年生ながらとてもしっかりもので、常に周囲への気配りを欠かさない彼女は、皆の母として慕われています。朝は目覚ましが鳴る前に起床、お粥とお芋を好み、正座してお茶をずらずと啜るその姿はまさしくおっかさん。そんな正座...いや星座ちゃんですが、とても勉強熱心で、年下とは思えないくらい確固たる信念や考えを持っています。好奇心旺盛で、疑問に思ったことは何でも次々切り込んでいく彼女には、先輩ながら大変刺激を受けました。そんな私は、一方でボケのつもりなく次々とハイレベルなボケを繰り出す星座ちゃんに次々とツッコミを切り込んだしだいです^^



油谷さやか BY: 飯山

自分の中で強い問題意識を持ってプログラムに参加し、グループワークでは2年生ながらもしっかりと自分の意見を発言し、またプレゼンテーションを行ってくれました。移動中や食事のムードメーカーでもあり、自分の世界観のもと、例えば理想の男性について語る姿はとても活き活きとしていました。そしていつかの食事では、中国式円卓を何周もさせて、出されたピーナッツをひたすらつまんでいましたね。最終的には皿を円卓から下ろしてしまうという反則技も繰り出し、常に私を驚かせてくれました。その積極性はぜひとも見習いたいものです。これからの活躍にも期待大の Active Woman!



おまけ☺ガイドさん BY: 平川 & 油谷

葛さん@上海

葛さんを一目見た瞬間、あなたも「どこかで会ったことがあるような…」という錯覚に襲われるのでは!? 面白い! 力が良い! チャーミング! 女性陣から「是非第2夫人にして下さい!」という声も(笑)「何と答えたら良いのでしょうか…」と照れまくりな葛さんもキュートでした♪ そんな葛さんに一目お会いしたい人は、是非平日お昼「ラ〇オンのごきげんよう」で☆



歩さん@北京

いつも温かいまなざしで私たちの旅程のサポートしてくれた歩さん。企業訪問のときに熱心にメモを取っていたり、待ち時間に政治経済系の雑誌を読んでいたりと、勉強熱心なガイドさんでどんな些細な質問にも真剣に答えてくれました。空港で私たちがゲートを通過するまで見送ってくれた優しい姿はずっと忘れません。謝謝!

お二人ともほんとうにありがとうございました。この場を借りて感謝申し上げます。



• PICS IN CHINA •



ちゅーごく萌え〜♥



↓万里の長城



→ 北京にて





庭園にて。キラーン☆



上海の夜景と★



公園サイクリング！



屋台でさそりに出会ったー

• PICS IN CHINA •



訪問行ってきます！



人民パワー！

もうすぐ帰国。。。思い出いっぱい！

↓
仲
良
し
姉
妹
♪





上海のTV塔↑
今日は私だけのもの♡

上海の御苑⇒
先生若いな～。
うっすらと映っているガイドさんの
笑顔もステキです。



↓北京のお土産屋さん
「来世は壺になりたい。」BY内野



❁ PICS IN CHINA ❁

⇒北京ダック専門店
リアクションの大きさに定評のあ
るチャリンさん（奥）



⇒北京の地下鉄
終電を逃したにも関わらず、ZYOZYO
立ちのチャリンさん（手前）



↓紫金城
今月の「城廻り」創刊の表紙
とかにいいんじゃない？





↑上海の御苑にて

↓北京の百貨店にて
「部長！今年のポッキーは
この子達で売り出しましょう！」



↑上海のコンビニ

↓上海の森ビル
世界一高いトイレ！
…なんの意味もないけど。



↑「なるほど！ファウストはワ
ルプルギスの夜に..ムニヤム
ニヤ」



↑成田空港



SHOPPING

●値切り●

「すみません、もうちょっと値段下がりませんかね〜？」
 …な〜んて、皆さん、日本のお店でこんなこと言いませんよね？しかし！中国では是非勇気を出して言ってみましょう。私達も実践してみたところ…驚くことなけれ！なんと値段が10分の1になったケースも！如水会OBの方によると、大体5分の1までは下げられるようですよ。ただしあまりに低い値段を設定すると、店員さんを怒らせてしまうことがあるので、気をつけましょう☆

●店員さん●

道中とてもユニークな店員さんに会いました！下の写真にもあるお茶のお店。右手前のお姉さんが、丁寧にお茶の飲み方を教えて下さいます。とても滑らか、早口な日本語で、場を和ませて下さいました☆そして私がお茶を買おうか迷っていた時。すかさず店員さんが買い物カゴにお茶を投げ入れて下さいました笑。「いや、まだ迷ってるんだってば！」という私の日本語も届かず、黙々と伝票表に書き込む店員さんでした…。

そして、何と言っても中国の店員さんは押しが強い！！商店を歩いていると、店員さんが商品を持って猛烈アピールして下さいます！押しに弱いとあるメンバーは、ストラップ(×3)を100円で購入…(相場は大体50円？)。好奇心は柔軟に、お財布のヒモは固くして買い物に挑みましょう！



……………
 観光と言えば…ショッピング☆★観光客向けのお店はもちろん、現地の人々が利用する屋台、商店、スーパーマーケットに行くと、その国特有の食習慣を見つけることができるかも！？
 ……………

●不思議なものがいっぱい！●

中国には、不思議なものがいっぱいあります！特に屋台。へびはもちろんのこと、ヒトデ、サソリ、ムカデ、サメなどの串刺しが屋台にズラリ！！早速うちのリーダーことチャリンさんもイカの丸焼きに挑戦☆…しかし！！お裾分けしてもらった数人がその後体調不良に…(タイ出身チャリンさん本人は何ともなかったようですが汗)。皆さん、屋台は見て楽しみましょう。





SANITARY*

●空気●

中国到着後の初めての朝。空を見上げると…。「これは雲！？霧！？」と思わせるほど、空には白いモヤが！添乗員さんに尋ねたところ、「大気汚染が原因では」とのこと。しかも雨に降られた日の翌日、様子は一転！空はとてもクリアな青色をしていました。きっと雨で全て流されたのでしょう。(雨の含有物を想像すると恐ろしいですが…) 下の写真は世界一の展望台、森ビルから覗いた中国の空。お天気は晴天、上空は真っ白でした。日本の高度経済成長期はどうだったのかな！？



●トイレ●

中国のトイレ事情は、日本と大きく異なります！①大半のトイレにトイレトーパーがない、②トイレトーパーは流さずゴミ箱に捨てる、③流すためのボタンがどこにあるのかわからない(上から伸びたヒモを引っ張る場合も)…などがありました。

そして中国には、衛生状態が不安なトイレから、日本よりキレイなトイレまで…実に多様なトイレがあります！右

(中)の写真は、万里の長城にあるトイレ。なんと、トイレに格付けがされています。ちなみにこの4つ星トイレは、日本のサービスエリア級でした。右(下)の写真は、森ビルのトイレの一角！なんと、ガラス張りトイレです。実際に使用するかは別として、とても美しいトイレでした。絶好の

「現地に行って初めて知ることができる！」ものの1つは、その国の衛生では！？経済発展が著しい中国ですが、衛生の改善度も気になるところ。ここでは、特に日本とは異なる中国の衛生事情をお知らせします☆



写真スポット(?)なので、是非皆さんも訪れてみて下さい！

